

セッション3 <第3分科会>記録

「高等学校における特別支援教育の今、これからを語る」

研究報告 : 笹森 洋樹 (独立行政法人国立特別支援教育総合研究所総括研究員)

シンポジスト : 鈴木 龍也 氏 (福島県教育庁特別支援教育課指導主事)

高橋 基之 氏 (東京都立目黒高等学校校長

／全国高等学校校長協会常務理事)

吉田 美穂 氏 (神奈川県立田奈高等学校教諭)

渥美 義賢 (独立行政法人国立特別支援教育総合研究所客員研究員)

笹森 洋樹 (独立行政法人国立特別支援教育総合研究所総括研究員)

司会 : 梅田 真理 (独立行政法人国立特別支援教育総合研究所総括研究員)

第3分科会では、笹森洋樹総括研究員からの「高等学校における発達障害等の特別な支援を必要とする生徒への指導・支援に関する研究－授業を中心とした指導・支援の在り方－」の報告の後、上記シンポジストによる討論が行われた。

シンポジストは登壇とともに、本シンポジウムにおけるメッセージ(鈴木氏「個に対応できる教育課程編成」、高橋氏「みな得意不得意がある キャリアスイッチ発揮!」、吉田氏「対話からはじめる支援 適格者主義は越えられるか?」、渥美「(高校の)役割が変わった!!」、笹森「『わかりません』と即答されない授業づくり」)を会場に向けフリップを見せて提示した。

シンポジウムは、前半は「柔軟な教育課程の編成について」、後半は「高校における今後の特別支援教育の方向性について」を柱として行われた。

前半ではまず、鈴木氏から「高等学校における柔軟な教育課程編成の必要性」について、県教育委員会から見た高校の現状、文部科学省研究開発学校の指定を受けて「自立活動」の設定による教科学習を行った高校の実践とその後の県の取組、今後の教育課程編成の在り方等について話題提供がなされた。続いて、笹森総括研究員から、国立教育政策研究所教育課程調査官の濱野清氏から寄せられた資料「改定学習指導要領のポイント」について説明があり、柔軟な教育課程編成に関わる規定や観点別評価について話題提供がなされた。これらを受け、シンポジストにより、進学率の変化による高校の役割の変化やそのような状況における高校教育の重要性、高校の多様化や中堅校の生徒の多様性、学び直しの方法の重要性、高校側の意識の現実(適格者主義)を踏まえて支援教育を考えざるを得ないこと、観点別評価の在り方等について討論が行われた。

後半では、高橋氏より、高等学校長の立場から、校内での特別支援教育体制の構築や実践で大事なこと、キャリア教育の4領域の力に対応した「キャリアスイッチ」の考え方等について話題提供がなされた。続けて、吉田氏から「田奈高校の実践から、高校における支援を考える」として、少人数展開等により生徒との対話を増やす取組、教員同士の対話を通じた教員集団の協働、「どうしたの?」という言葉からはじめる生徒の見守り等について話題提供がなされた。これらを受け、シンポジストにより、生徒の状態の把握・理解の仕方、その情報の教員間での共有、キャリア教育、就労支援・進路指導等について討論が行われた。

(以上、要項 P.20 参照)

<参加者からの意見>

- ・確かに高等学校の教育課程は緩和されたが、必修は存在し、自立活動を設定している高校はほとんどない等、難しい現状である。
- ・インクルーシブ教育システム構築により高校教育はどうなるのか。
- ・現場の教員が教育センターで研究を行うことで、特別支援教育の観点を入れた教育の可能性について理解を得られたが、それでも意識の問題が大きい。特に中学と高校の連携が難しい。
- ・私立学校の存在を意識においた研究をしてほしい。
- ・高校生には、小中学校の復習を徹底的にするよりも、探求的な力をつけることに重点を置いた方がよいのではないか。
- ・学力は高いが、落ち着いた環境でないと力が発揮できない生徒に対応した、高い水準での学習ができる場が必要である。
- ・学力はあるがコミュニケーション力が弱い生徒、また、その逆の生徒もいる状況での、学び直しの効果の再検討
- ・個別の指導計画で設定した目標をクリアしても、何点以上必要という評価の問題で進路変更を余儀なくされるケース等、評価の問題がある。

<まとめ>

司会の梅田真理総括研究員より、高等学校で特別支援教育をどう考えるかは大きな課題であり、このシンポジウムをきっかけに議論の広がりを期待する旨述べられた。